

会 議 録

会議の名称	令和８年度 第1回あま市スポーツ推進連絡会議
開催日時	令和８年８月４日（火）午後７時から午後８時２０分
開催場所	七宝総合体育館 １階 会議室
内 容	1 開会 2 委嘱状交付 3 教育長あいさつ 4 自己紹介 5 会長あいさつ 6 議題 (１) 令和７年度第２回あま市スポーツ推進連絡会議録について (２) 令和７年度第２回あま市スポーツ推進連絡会議における意見と検討状況について (３) 令和７年度スポーツ推進計画にかかる関係課の取組項目の結果・評価について (４) 令和８年度スポーツ推進計画にかかる関係課の取組項目について (５) 意見交換 【テーマ】 生涯スポーツの推進について 7 その他
資 料	・ 次第 ・ 名簿 ・ 座席表 ・ 事前質問及び回答 ・ 【資料１】 令和７年度第２回あま市スポーツ推進連絡会議録 ・ 【資料２】 令和７年度第２回あま市スポーツ推進連絡会議における意見と検討状況について ・ 【資料３】 令和７年度スポーツ推進計画にかかる関係課の取組項目の結果・評価について ・ 【資料４】 令和８年度スポーツ推進計画にかかる関係課の取組項目について ・ 【資料５】 生涯スポーツの推進について
出席委員	石塚吾歩路委員、石塚建伸委員、井戸輝政委員、木全克己委員、藤田琢也委員、猪飼哲也委員、竹田竜一郎委員、立松武子委員、石原晶子委員、 （委員名簿順）

欠 席 委 員	中村博美委員
事 務 局	(教育委員会) 伊藤克仁教育長、徳永増美津教育部長 (教育部スポーツ課) 田口健次郎課長、江上博孝主幹、家田幸治主幹、鹿島みどり課長補佐、水野晃寛課長補佐、

会議の経過

- 1 開会
- 2 委嘱状交付
- 3 教育長あいさつ
- 4 自己紹介
- 5 会長あいさつ
- 6 議題

- (1) 【資料1】令和7年度第2回あま市スポーツ推進連絡会議録について

事務局から説明

【質疑応答】 なし

- (2) 【資料2】令和7年度第2回あま市スポーツ推進連絡会議における意見と検討状況について

事務局から説明

【質疑応答】 なし

- (3) 【資料3】令和7年度スポーツ推進計画にかかる関係課の取組項目の結果・評価について

事務局から説明

【質疑応答（事前質問）】

令和7年度（結果・評価）について

令和7年度の結果・評価について、様々な講座・教室が開催され、○及び×で評価報告されている。担当者が講座開催中に講師の指導様子及び受講生の感を聴き取り、振り返りを行い、次年度に活かしていると考えられるが、その現状を説明いただきたい。

事務局：スポーツ課を例に挙げると、受講生のアンケート結果から、好評であった講座や教室については、継続していく方向で進めている。また、あまり好評でなかった講座や教室においても、申込みがある以上、参加者に興味があると考えられるため、好評でなかった理由を分析し、原因を改善していくように努めている。

(追加の質問は無し)

(4) 【資料4】令和8年度スポーツ推進計画にかかる関係課の取組項目について

事務局から説明

【質疑応答（事前質問）】

令和8年度 部活動地域連携・地域推進展開について

国のガイドライン（令和8～10年度『改革実行機関』前期）では「原則、すべての学校部活動において地域展開の実現を目指す」とありますが、あま市教育委員会の取り組みはどのように進んでいるか。

事務局：休日の部活動の地域連携・地域展開については、現在、陸上及び柔道において受け入れを実施している。令和7年度の取組結果・評価にも記載されているとおり、令和7年9月から受益者負担の徴収を開始した。令和8年4月1日に「あま市部活動地域連携・地域展開推進協議会」を設置し、学校を始めとする関係団体及び関係者と意見交換を行い、連携体制の強化に努め、今後の部活動地域展開の方向性を検討中である。

【会議中での質疑応答】

委員：新しい事業で取り入れた「マンカラ」とはどのようなものか説明いただきたい。

事務局：マンカラはアフリカ及び東南アジアで古くから遊ばれているゲームである。現在は世界各地に広がり、遊び方は100種類以上あると言われています。

委員：令和7年度でディスクゴルフの評価が高くなかったため、それに代わって実施するということか。

事務局：そのとおり。

(5) 意見交換

【資料5】生涯スポーツの推進について

事務局から説明

会長：皆様のご意見や、ご提案・情報などをいただければと思います。

委員：事務局から事前に「生涯にわたってスポーツや運動を楽しむ方法」について質問を受け、資料を作成した。以下の点を認識している。

1. 体験できる場の拡充の重要性

体育館の広場を利用した昼休みボッチャ体験を実施

第79回全国レクリエーション大会を開催（市長、県関係者も参加）

マンカラなど多様なニュースポーツを導入（豊田市、犬山市等の他市でも実施）

ドッチビーを今年実施予定

2. 体験会の実施状況

老人クラブ、放課後子ども教室、児童クラブ、地域サロンで体験会を実施している。しかし、体験だけで終わり、継続的な参加につながらないという課題がある。

また、イベント事業が多く土日に開催されるため、参加者が集まりにくい状況である。参加者集めに苦戦している。

3. 今後の方向性

ラジオ体操を朝実施しているところに出向き、普及を進める新しい方法を検討している。体験会から参加者につなげることが今後の重点課題である。

会長：ありがとうございました。次、お願いします。

委員：スポーツ少年団（例：空手）は特化した大会での勝利を目指す傾向がある。勝つことを重視した練習になりがちである。

提案1：多世代参加型イベントの必要性

「楽しんでやる競技」を多世代が参加できる内容にする必要がある。

お孫さんを連れた年配者が一緒に参加できるような内容が重要である。

多世代での参加を促すことで、参加のきっかけが生まれやすくなる。

提案2：継続のための支援体制

「楽しかった」で終わってしまう傾向がある。継続には専属の教える人や団体が必要である。親子やおじいさんとお孫さんでも遊べるような内容であれば参加しやすくなる。

会長：ありがとうございました。次、お願いします。

委員：基本的な考え方として、すべての子どもたちがスポーツや運動の楽しさを実感し、多様な視点からスポーツに親しむことが重要である。

取り組み1：校内縄跳び大会

実施時期：2月上旬

準備期間：11月末から開始

実施方法：休み時間を活用した継続的な練習、学年及び個人の目標設定、チャレンジカードで様々な飛び方に挑戦

大会の特徴：全校一斉に種目を決めてエントリー、全員が競い合える構成

指導の工夫：体力向上だけでなく、友達と励まし合いながら挑戦する姿勢を育成している。記録向上だけを目的とせず、一人ひとりのペースでの成功体験を重視し、「続けられた」という達成感を積み重ねることを大切にしている。

取り組み2：異学年交流活動「なかよしタイム」

少人数の学校であるため、異学年交流活動を盛んに実施している。

実施方法：上級生が下級生をリード。主に放課を中心に活動。6年生が企画し、全6学年で班ごとに実施

活 動 内 容：鬼ごっこ、ボール運動、リレー等の運動、雨の日は室内レクリエーション

指導の特徴：勝敗だけにこだわらない。協力し合い、励まし合う活動を重視している。運動が苦手な児童も安心して参加できる雰囲気構築している。

目 的：異学年交流を通じて、運動する楽しさと人とのつながりの大切さを同時に育成する。

取り組み3：インクルーシブスポーツの体験

今年初めて実施する取り組みとして、地域の高校と連携している。

実施内容：ボッチャ、ラダーゲッター等のインクルーシブスポーツを体験する。年齢、運動能力、障がいの有無に関わらず、同じルールで楽しめるスポーツである。連携先として、美和高校の地域探究科と連携し、美和高校の生徒がインクルーシブスポーツを児童に教える。10月実施予定。

期待される効果

運動が苦手な児童も参加しやすい環境を整備する。高校生との交流を通じて、互いを認め合い、支え合う心を育成する。スポーツの新たな魅力や楽しさを発見する機会となる。

取り組み4：アジアパラリンピック競技大会の観戦支援。

9月から開催されるアジアパラリンピック競技大会の観戦を支援している。

周知方法：ラーケーション制度の活用を積極的に周知している。文書配布、メール配信、ウェブページに掲載し、保護者へ積極的にアピールしている。

ラーケーション制度について：

愛知県が昨年から導入した制度である。郊外での学習や体験的な学習を行った場合、学校は欠席ではなく出席扱いとしている。当は3日間の対象日数であったが、アジアパラリンピック観戦の場合はプラス2日間取得可能に拡大された。

期待される学習効果：

トップアスリートの競技やパラアスリートの挑

戦する姿を間近で見ることで、スポーツの迫力や感動を体験する。多様性と共生社会への理解を深める貴重な学習機会となる。子どもたちに新たな視点と学びの機会を提供する。

会長：ありがとうございました。次、お願いします。

委員：「忍者フェスタ」の実施状況について

事業概要：幼児から小学校低学年を対象とし、毎年開催している。

課題1：宣伝方法

宣伝方法に課題があり、参加者数の集まりが悪い。

課題2：親の子育て環境の変化

ゼロ歳児から保育園に預ける子育てスタイルが一般的になった。親が直接子育てを行う機会が少なくなっている。親が子どもの本来の動きを理解していない傾向がある。

幼児期の動き教育の内容

はいはい・くぐる・飛ぶ・跳ねる・転がるなど本来の幼児期の動きを取り入れた運動遊びを実施している。子どもが自然にさまざまな動きを体験させている。

参加者の反応

継続を望む保護者がいる一方で、親が疲労を感じる場合もある。様々な動きができることの価値を感じている保護者も多い。放課後子ども教室での実践も進めている。

言葉がけの重要性

「スポーツ」「運動」という言葉では参加をためらう子どもがいる。「遊ぼう」という表現にすると、同じ活動でも子どもが参加しやすくなる。子どもの言葉の捉え方が参加意欲に大きく影響する。

親の参加の重要性：

大人と一緒に参加することが重要である。親も一緒に参加しないと、子どもの動きが限定的になる。親の姿勢が子どもの興味と参加意欲に影響する。

会長：ありがとうございました。次、お願いします。

委員：子育て中の親の運動機会の実態

現状分析：保育園に預けている間は、親は仕事をしている。親としての運動時間は極めて限定的である。

提案1：オンラインツールの活用

活用可能なツール

YouTube等を使用したオンラインヨガ、オンラインストレッチなど様々なオンラインツールが利用可能であるが、単独実施の問題点としては一人では継続が困難である。

コミュニティ化の提案：

公式LINE等のコミュニティアプリを活用し、オンラインヨガコミュニティを構築する。ママ友の感覚で仲間を求める傾向がある。つながり合い、励まし合うコミュニティ形成が必要である。行政がプログラムを紹介し、コミュニティを構築することが重要である。

提案2：隙間時間の活用

保育園送迎時の短時間プログラム：送迎時に15分程度のプログラムを実施する。子ども福祉課等との連携による実現可能性を検討する必要がある。

多課連携の必要性

スポーツ課のみでは実施困難である。「子育てママ」というくくりで、複数課での連携が有効である。

提案3：参加ハードルの低下

具体的施策

着替え不要。申し込み不要。いつでも参加でき、思い立った時に実行できる企画。参加障壁の徹底的な除去が必要である。

提案4：「スポーツ」ではない企画

名称・コンセプトの工夫

「スポーツ」というくくりではなく「楽しむ」に焦点を当てる。冒険ゲーム、謎解きなど遊び感覚での企画を実施し、親子でのまち歩き、家族での参加を想定する。ゲーム性を持たせたウォーキング等を企画することでハードルが低くなり参加が促進され、自然な形で身体活動が実現される。

会長：ありがとうございました。次、お願いします。

委員：主要なポイントとして「スポーツをする人を増やす」ことが目標ではない。「体を動かすことが楽しい」という体験を提供することが重要である。これを小さい子からお年寄りまで実感させることが大切である。継続させることが課題である。市民への情報提供の課題：現在、多くのイベントが実施されている。しかし、市民の多くはこれらの取り組みを知らない。情報発信体制の強化が必要である。商工会等の民間機関も巻き込んで情報を広めるべきである。

提案1：ニュースポーツに焦点を当てる

ニュースポーツの特性：「スポーツ」ではなく、ニュースポーツ（ボッチャ等）に焦点を当てる。障がい者でもできるスポーツであり、子育て世代でもできるスポーツである。誰もが参加できるという特性がある。

提案2：先進自治体の事例紹介

具体的な事例：堺市、上越市、越前市などが取り組んでいる。ニュースポーツハンドブックを作成している。「こういうのをやったら皆で一緒にやりましょう」というコンセプトで実施している。道具は市が用意し、いつでも貸出可能にしている。全国的にニュースポーツ推進の動きが広がっている。関係機関との連携として、レクリエーション協会等が関わっている。複数機関での連携が成功要因である。

提案3：美和高校との連携

現状：美和高校が地域探究科を新設している。地域の方と一緒にやりたいという方針である。ニュースポーツ講座を実施している。レクリエーションクラブ、あまスポーツクラブと連携している。ニュースポーツをどんどん美和高校や商工会、いろんなところに巻き込む。地域全体での浸透を図る。

提案4：参加障壁の低下

スポーツ嫌いの取り込み：「走るの嫌いな私には無理」と思っていた

人たちを取り込む。ニュースポーツの活用で可能性が拡大される。

提案5：商工会からの支援

イベント開催時に商品券の提供や各商工業者による支援（例：消火器提供）を行うことで、商工業者の宣伝効果が生まれ、企業・会社の認知度が向上する。

提案6：企業対抗・地域対抗スポーツ大会

背景と工夫：従来のリレー等では、スポーツが得意な人がいる地域が有利である。ニュースポーツでは順位が随時変わる。効果としては地域対抗で実施することで参加者が増加する。子ども会等からの参加が増加する。複数機関の巻き込みが可能になる。

提案7：既存施設の活用

ヨシヅヤにフェンシング、アーチェリーの施設が新設された。これらの施設を積極的に活用する。施設を借りてイベント実施する。

提案8：市民病院との連携

具体的な取り組み：骨密度測定による健康チェック。血管年齢測定など健康チェックを3年連続で良好数値の場合、商品を提供する。健康チェック後、駐車場を利用したウォーキング、ストレッチ教室を実施する。機関連携による市全体での取り組みの推進が必要である。

会長：ありがとうございました。次、お願いします。

委員：現状認識では、70代以上の高齢者が週3回以上スポーツ・運動を実施する割合は、男性39.4%（約40%）、女性31.2%である。実施していない層は、男性60%、女性70%である。問題提起としてなぜ60～70%の方は参加しないのか。この層に参加してもらう工夫が必要である。

考えられる理由として、自分に合ったスポーツがない。施設が遠い。身近でそのようなことができないなど様々な課題がある。ラジオ体操の特性と利点は参加の容易さ、ユニフォーム、グローブ、バット、スパイク等が不要である。そのままの格好で参加可能である。右左も関係ない。指導者は逆バージョンでやるが、参加者はどちらでもいい。第1体操が終わってから第2体操から参加でもいい。厳格なルールを作らない。「ご自由にどうぞ」というスタンスで実施している。

継続のポイント：「出やすくする」ことが重要である。「継続させる」ことが最重要である。沖之島では、8～9年間の継続実施しており生活習慣化している。

付加的な効果として安否確認機能を備えている。「〇〇さんが2～3日見えない」という気づきから、地域見守りの機能が生まれている。コミュニケーション形成と社会的つながりの構築が実現されている。

高齢者参加促進のポイントとしては、受け入れ態勢の工夫、出やすくする工夫、継続させるための支援。厳格でないルールづくり。「好きな時に来て

好きな時に帰る」というスタンスなど段階的なルールづくりをし、まず土台を作る、ある程度の参加者が集まってからルールづくりを行うという段階的なアプローチが必要である。

全国比較をしてもあま市のパーセンテージは決して低くない。全国平均と同等程度である。

施策の方向性として、身近で参加できる場所、誰もが参加できる場所、皆で協調できる場所と時間の提供が重要である。これにより参加者増加が期待できる。

会長：ありがとうございました。次、お願いします。

委員：皆様からのお話により、全体が集約されているという認識である。

障がいの方が気軽に身近にスポーツに取り組むことについて

支援の必要性1：環境整備

物理的環境：施設のバリアフリー

心理的環境：心のバリアフリー

支援の必要性2：情報提供

現状認識としては障がい者は十分な情報を得られていない。また、情報が得られない方が多いので、スポーツ機会に関する情報や、やりやすい環境に関する情報の発信が必要である。

支援の必要性3：指導者体制

専門指導者の役割：専門の指導者により教えていただくことが重要である。障がいのある方も取り組みやすくなる。健常者も専門家に教えてもらおうと楽しさが増す。

支援の必要性4：コミュニティ仲間とつながりの重要性

仲間やコミュニティの存在が大変重要である。

支援の必要性5：ルールづくり

障がいのある方が取り組みやすいようなルールづくりが非常に大切である。

実施事業としては、祉実践教室等で行っている。福祉教育の場でボッチャを実施している。身近なところでの体験提供を推進している。また、計画に掲げるインクルーシブスポーツの普及の推進が必要であり、障がいのある方といろんな方々が一緒にやっていくことが大切である。

会長：ありがとうございました。欠席の委員から提案等をいただいていると事務局側から報告を受けておりますので事務局、説明をお願いします。

事務局：30代～40代女性の特徴として、妊娠・出産・育児・就労などのライフステージの変化が伴う。これまで続いていたスポーツや運動習慣を途絶えやすい年代である。生涯にわたり気軽にスポーツを再開・継続することが課題である。課題解決として3つの課題が考えられる。

課題1：参加ハードルを下げる

この世代は子どもの予定や家族の都合により、自分の予定が立てにくい。定期講座ではスケジュール調整が難しく、参加を躊躇しやすいの

で、1回単位で気軽に立ち寄れる講座を増やす。継続強制ではなく、自由度を高める。

次に、初心者向けのネーミングにする。「初めてのヨガ」「初心者からのダンス」等のネーミングを採用し、初心者へのハードルを下げる。

テーマ設定の工夫

姿勢改善、骨盤調整、コンディショニング、リフレッシュ等をテーマに設定する。運動から遠ざかっていた層も参加しやすくなる。

課題2：通しやすい環境づくり

子どもの同伴対応

子連れOKの環境整備を行う。同じ部屋の一角に子どもの遊びスペースを作成する。託児ボランティアを配置する。子どもを連れたままでの参加が可能になる。

託児サポート付き教室

託児サポート付き教室の実施を行う。安心して親が参加できる環境を構築する。

時間帯の設定

ナイトレッスンの実施、土日開催を行う。仕事終わりや休日に参加可能な時間帯が必須である。

過去の失敗例から学ぶ

以前、託児付きヨガ教室を開催していた。開催時間は平日午前中であった。年々、1歳になる前に職場復帰する母親が増加した。利用者が減少し、託児を廃止した。仕事終わりや休日に参加できる時間帯が必須である。

オンライン・ハイブリッド対応

教室に行けない場合も対応する。自宅から画面オフで気軽に参加できるズーム配信等を併用する。柔軟な参加方法の提供を行う。

課題3：情報発信の工夫

現状認識

広報誌だけでは足りない。30～40代の利用率が高いSNSを活用すべきである。

SNS活用

インスタグラム、LINE公式アカウントの活用を行う。30～40代の利用率を活かした情報発信を実施する。

ショート動画の活用

ショート動画を使った発信を行う。実際のレッスンの様子を配信する。講師の雰囲気を発信する。初心者への安心感提供を行う。「初心者でも大丈夫」というメッセージを伝える。

会長：一通り皆様のご意見賜りました。追加のご意見等はございますか。

委員：eスポーツやボッチャなどのインドア型のスポーツについて、講師になるの

に資格が必要か。

委員：資格の必要性

種目によってほとんど指導員資格または審判資格を講習で取得する必要がある。正式な試合でない場合は「体験したら大体こんな形」という程度の対応で問題ない。

現状の課題としては、携わっている人が正確には審判資格・指導員資格を持っていないと、あまり良くない。これが現状である。

委員：子ども・親への認定資格付与の提案

小学生、親、小中学生に資格を与える。賞状または認定書を付与する。「僕はこのボッチャの審判員だ」という自認識を持たせる。もっと積極的に参加、普及活動につなげることができる。

市独自認定の可能性：市が勝手に認定資格を作ってもいいか。ボッチャ判定員2級、1級等の階級制を作ったら楽しいのではないかな。

委員：公式資格の制限

日本協会があるため、完全な独立認定は難しい。

代替案：「NPOあまスポーツクラブ認定の指導員」という形での認定は設けることができる。ただし、日本協会の公認審判員とは異なる。地域レベルでの認定となる。

会長：委員の提案は「本当にいいヒントが隠されている」ことである。イベント時に大人が意図的に子どもに司会や運営をさせると、関心が高まり積極的になる。このアイデアは「すごく面白いアイデア」である。

委員：学校の授業でこのような取り組みを取り入れるのに制限があるか。

委員：教員が学習内容の一環として取り入れたいのであれば、行える考える。

委員：美和高校の取り組み

美和高校が地域の子どもたちやお年寄りと触れ合う講習を実施している複数回、講習会に参加している。

五条高校の展開

五条高校も県から指導員を受けて同様の取り組みを実施予定である。若い世代（高校生）と地域の交流が進む。地域探究科が拡大している。

県の資格制度

県も独自の資格をレクリエーション協会で多数発行している。今後の展開提案内容（認定資格制度）を参考に、資格制度の検討を進めたい。

会長：ありがとうございます。

委員：あま市の健康マイレージ制度の存在

制度の現状

健康で何かがたまり、何か商品がもらえるシステムである。

提案1：子育て世代への活用

ポイント還元の工夫：ポイントを学校に還元する仕組みを構築する。子どもたちに何かが還元される。寄付的な事業展開となる。みんなが頑張ったら親がもっとしてほしいという親のニーズに応える。

商品ではなく予算還元：商品の代わりに学校に予算を還元する。現在は物が充実しているため、中途半端な物よりも実質的価値が高い。

提案２：シニア世代への活用

シニア向けのポイント制度

シニアに還元できるようなポイント制度を構築する。シニア層の参加を促進する。

関連効果

「子どもが先生になる」との連動により、先の提案（子どもが審判員になるなど）と連動すると学校内に浸透しやすい。

会長：ありがとうございます。他にございますか。

委員：コミュニティイベントの新企画

ダンスバトルイベントの実績：最近、ダンスバトルイベントを実施した。

６月ごろの開催であった。市長も参加した。親子で昭和歌謡ダンスを一緒に実施した。

成功要因

敷居が低い、自然な参加が実現された。若い世代にもとっつきやすかった。

盆踊りの活用提案

郡上のような地域ブランドの盆踊りを参考にあま市でも「あま音頭」という個性的な盆踊りをつくることはできないか。

「ダンス」という形式の方が若い世代にはとっつきやすい可能性がある。

会長：その他の提案について、事務局側で答えられることはありますか。

事務局：即答はできません。

会長：わかりました。

結びに、近年、高度情報化による生活の変化と少子高齢化が進展している。健康や運動・スポーツへの市民の関心が高まりを見せている。健康保持増進を目的にスポーツに取り組む市民が増加している。

今後の推進方向

市民のあらゆるスポーツ活動の推進。年齢やライフステージ、性別、障がいの有無などの多様性に応じた施策。誰もがいつでも・いつまでもスポーツや運動に親しんでいける環境づくり

期待される成果

人生100年時代において、スポーツや運動を通じて、市民に元気と笑顔があふれる。心身ともに健康で充実した毎日が過ごせる。

会長：本日の議論の評価

全体的な評価

「本当に皆さん、いろんなアイデアを今日出してくれた」

「本当にこういう難しい流れの中で今日の議論はいいものがいっぱいエ

ッセンスが入っている」

「上手にまとめて、それをいかに展開していくか、実施していくかが重要」

今後のプロセス

事務局への指示

出されたご意見及びご提案等を整理する。事務局と会長で、ご意見及びご提案等の内容について今後の方向性をまとめる。改めて全委員にお示しする。委員の皆さんはその方向でよろしいか。

委員：異議なし

会長：ありがとうございました。

その他について

事務局：次回会議の和8年度第2回あま市スポーツ推進連絡会議開催時期については、令和9年2月頃を予定している。決定後、改めて各委員に案内を送付する。

アジア競技大会「クラッシュ」練習会場の公開

競技についてはクラッシュであり、ウズベキスタンの国技である。会場は甚目寺総合体育館がクラッシュの練習会場に指定されている。

公開練習日時

日程：令和9年9月25日（金）及び26日（土）

時間：午前9時30分～午後4時

出場国：19か国のトップアスリートが参加予定である。

参加確認：日本も参加予定であるが、25日及び26日の公開時間帯への参加は未確定である。

その他の時期の練習については、24日（木）の来日初日に練習がある可能性がある。未確定であるが、可能性がある。9月27～29日の本大会期間中も練習にみえる可能性がある。

公開情報の範囲：広報やウェブサイトでの掲載対象は、確定している25日及び26日のみである。

会長：最終確認。次回の連絡会議につきましては日程が決まり次第、各委員の皆様に案内文書を送付させていただきますので、お願いします。

会議終了の宣言

会長：それでは以上をもちまして、本日の連絡会議を終了いたします。